



平成28年県内トップの 1等米生産を目指して

基本技術の励行

平成27年産米の品質は一等米比率で84.6%となり、前年の91.7%を下回る結果となりました。

検査時の主な格落ち理由としては、除青未熟粒、心白粒、胴割粒があげられます。要因としては、①5月6月の高温により、1株当たりの茎数が増え、除青未熟の原因となったこと②8月中旬の曇天・多雨による登熟不足③刈り遅れによる品質低下などが大きく影響していると思われます。

刈り遅れにより、胴割粒の発生が助長された圃場や、カメムシの被害が確認された圃場も散見されました。カメムシについては、被害粒の混入が少量であっても格落ちの要因となります。

J Aや県などからのカメムシ発生情報を注視し、防除適期を逃さずに、確実に防除を徹底しましょう。

また、籾混入も例年より多く見られました。籾の流量を減らすなど、丁寧な調整をお願いします。

気象変動に負けない稲づくりには「土壌」「適切 な水管理」などの基本技術の励行が最も重要になります。

次のページにあげるポイントを確実に取り組みましょう。

また、J Aでは稲作の情報提供を迅速に進めるため、メール配信を行っています。ぜひご利用ください。

メール配信のお申込みは、各営農経済センターにて随時受付けております。

稲作情報



品質・食味の高位安定化に向けて 次のポイントに注意

① じょうがポイント

① **ていねいな耕うん**
しっかりと根を張り、健全な発育を促すため、耕深15cmを目標に耕うん作業を行います。ただし、急激に深くすると初期生育不良を起す場合がありますので1年に1〜2cm程度としましょう。

② 施肥改善

② **施肥改善**
過剰生育とならないよう基肥量の見直しを行います。穂肥をしっかりと施すことが品質向上につながります。
また基肥一発肥料は地方などに応じて慎重に施肥量を決定する必要があります。
(控えめが基本)

③ 早目の中干し・溝切り

③ **早目の中干し・溝切り**
移植後30日を目安に遅れずに中干しを実施し、生育過剰が予想される場合は早めに中干しを開始するようにしましょう。なお、中干しは遅くとも出穂30日前までには終了するようにし、小ヒビが入る程度での終了を基本としましょう。
溝切りは後の水管理(飽水管理)作業を容易にしますので必ず実施しましょう。

④ 水管理の徹底

④ **水管理の徹底**
中干し以降は飽水管理を行い、圃場を乾かし過ぎないようにし、特に夏場の高温時には出来るだけ入水しましょう。
完全落水は出穂後25日以降としましょう。

⑤ 的確な穂肥対応

⑤ **的確な穂肥対応**
穂肥は品質や食味・収量に大きく影響しますので生育状況に応じた対応が必要になります。しっかりと施せるように稲姿を調節することが最大のポイントになります。さらに2回目の穂肥は、登熟期の栄養不足を防ぎ品質向上が期待されますので必ず施しましょう。

なお、基肥一発肥料についても、高温で推移した場合等、状況に応じて穂肥の施用を検討しましょう。

⑥ 適期刈取り

⑥ **適期刈取り**
機械・施設能力に応じた作付や品種の変更、作付時期をずらすなど、刈取り適期の集中や刈り遅れによる品質低下を防止しましょう。

⑦ 土づくり

⑦ **土づくり**
気象変動に負けず、高品質・良食味米を生産するためには、有機物や微量要素が多く含まれる豊かな「土」を作る必要があります。単年度では効果が見えづらく労力も掛かりますが、積極的に有機物や土づくり資材を投入し「土」を育てましょう。

⑧ 安全・安心

⑧ **安全・安心**
使用する農薬・肥料などは、必ず使用方法を確認し安全使用に留意しましょう。
種子更新・苗購入先や使用品目名・量などは栽培管理日誌へ正確に記入しましょう。